オレの普通科から始まるヒーローアカデミア

高木橋　ユウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちょっと思い詰めちゃうオレっ娘の普通科から始まるヒーローアカデミアです。まあ体育祭だけですが。嘘でした。

目　次

オレの普通科から始まるヒーローアカデミア ―― 1
後日談 ―― 14
次に向けて ―― 26

オレの普通科から始まるヒーローアカデミア

会場全体が熱気に包まれている。それもそのはず、何故なら今日は年に一度の体育祭。雄英高校の体育祭だ。そして一年の会場の熱気は特に凄い。ヒーロー科Ａ組がヴィランの襲撃を乗り越えたという話が出回り、その生徒達を見ようと観客達が多いのだ。

そんななかオレは普通科の場所から、ヒーロー科を眺めていた。

◊？◊？◊？

ヒーロー科の入試一位、爆豪勝己が選手宣誓を行い一年全体からヘイトを買った。馬鹿だ。

まあでも、あれで張り合おうとするやつと諦めるやつが出てくるんだろう。オレは一発殴りたくなった。うん。

おっと、最初の競技が決まった。最初は障害物競走らしい。何とか上位にくい込んでヒーロー科にギャフンと言わせたいな。

あ、もう皆スタート地点に進んでる。オレも早くしないと・・・。

ランプが一つ、二つと点いて行く。三になればスタートだ。

・・・・・・・・ くる。

『スターーーーーーート!!』

ッ！ジャンプ！と同時に地面が氷漬けになる。一番前にいた人がやったらしい。危なかった。

『さぁいきなり障害物だ!!まずは手始め・・・ 第一関門ロボ・インフェルノ!!』

うわぁーめんどうだなぁ・・・ ん？また氷の人が今度は一番デカいロボを氷漬けにした。でもよし！これで簡単に抜けられるぞ！

「止めとけ。不安定な体勢ん時に凍らしたから・・・ 倒れるぞ」

わわわ、マジじゃん！うーん・・・ あ、あそこ大丈夫そう。

『1―Ａ轟!!攻略と妨害を一度に!!こいつぁシヴィー!!!』

氷漬けの人轟って言うのか。しかもヒーロー科。こりゃあ負けたくないなぁ・・・。

うーむ・・・ 解説のプレゼントマイクがいっぱい喋ってるけど、Ａ組ばっかだな・・・。

あ、なんか来たぞ？

『オイオイ第一関門チョロいってよ!!んじゃ第二はどうさ!?落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!ザ・フォール!!!』

綱渡り・・・ ？面倒だし普通に走っていくか。

『さあ先頭は難なくイチ抜けしてんぞ!!』

え、マジか!?早いな轟！

『先頭が一足抜けて下はダンゴ状態！上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずにつき進め!!』

オレって今どこら辺なんだろう？轟は見えないし後ろのダンゴも見えないんだけど？

『そして早くも最終関門!!かくしてその実態は一一一一・・・ 一面地雷原!!!怒りのアフガンだ!!地雷の位置はよく見りゃわかる仕様になってんぞ!!目と脚酷使しろ!!』

うわっマジで地雷原じゃん。えーと、地雷がないのは・・・ と、う～んこのルートだな。よし、行くぞー！後ろでバコンバコンいってるけど気にしたら負けだぁ！先頭に追いつくように走れー！ッ！デッカイ爆発!?えーと、あ、今！

後ろでなったどデカい爆発と同時に全力疾走を始める！体力はあるけど足早くないんだよなぁーー?!

『さァさァ序盤の展開から誰が予想出来た!?今一番にスタジアムに還ってきたその男一一一一・・・ 緑谷出久の存在を!!』

んげ!?二位?!うっそマジかよ～・・・・・。って緑谷って人がさっきの爆発の原因か。うーむ、そこそこ鍛えてるっぽいし、オレより早くてもおかしくないか・・・。

『さあ続々とゴールインだ！順位等は後でまとめるから、とりあえずお疲れ!!』

まあいっか。普通科じゃあ一番だし！

◊？◊？◊？

やっと皆が会場に戻ってきた。これで集計は終わりかな?あ、ミッドナイト。
「ようやく終了ね。それじゃあ結果をご覧なさい!」
あ!凄い!モニターにオレ写ってる!おーい母ちゃん見てる~?
「さーて第二種目よ!!」
あ、次だ。
「私はもう知ってるけど~~~…何かしら!!?言ってるそばからコレよ!!!」
えーと、騎馬戦?え、オレの友達みんな落ちちゃったんだけど?
…なるほど。騎馬戦のルールはだいたいわかった。つまりオレの持ちポイントは２０５とか関係なく一位の１０００万を取りに行けばいいと!…でも第二種目を突破するだけなら１０００万取らなくてもいいんだよな…。まあでも、なんにしたって組む人いないし意味無いか…。
「おい」
む。
「組んで上げてもいいけど、オレにそういうのは効かないぞ」
「…っち」
「あ、待てよー!組んでくれー!オレの個性なら絶対にポイント取られないから~!頼むよぉー!!!」
「っおい!引っ付くな!ぁあ、わかったよ!組めばいいんだろ!」
「マジ?ありがとう心操!」
「…!なんで、俺の名前…」
「あ、ごめっ…やっぱり、チームいいよ…何とか探してみる…」
うー、またやってしまった…。テンション上がるとすぐこれだ。気を付けてたのに…。
「おい、待てよ」
「っひ、ごめっ、ごめんなさい!」
「あっ、おい!」
イライラしてた。怒ってた。オレまたやっちゃった。ど、どうしよ

う・・・。このままじゃまた前みたいに・・・。それに騎馬も組めないし・・・。ううううう・・・・・・。
「おい！」
「ッ！」
「逃げんな！組むって言ってんだし、俺と組めよ！」
「で、でも・・・」
「っち！手取(たどり)!!」
「ひゃいっ！・・・ って、え、なんでオレの名前・・・」
「うるせぇさっさと来い。お前が来れば騎馬が出来るんだよ」
「う、うん・・・」
まだ怒ってる・・・。うぅ・・・。とりあえず、騎馬戦では変な事とかしないようにしよう・・・。心操ならオレ抜きでも上位に入れるだろうし・・・。

◊？◊？◊？

騎馬戦は何事もなく終了した。一緒に騎馬組んでた尻尾のある人と全体的に丸い人は終わってから心操の個性を解いていた。
オレは騎馬戦が終わってすぐ、会場を出た。一人になりたかった。入口から離れた会場の外壁に背中を預けて座り込む。
どうして、こんな思いをしないといけないんだ・・・。ヒーローなんか、目指さなければ良かったのかな・・・。でも、でもなぁ・・・。見ちゃった。知っちゃったから。オールマイトが、平和の象徴が、もうヒーローとしてどころか、死んじゃう寸前だって・・・ 知っちゃったから・・・。
「うっうぅぅぅ・・・・・」
ヒーローはいない。命を賭して民衆を救う本当のヒーローはいない。唯一、オールマイトだけが、平和の象徴たるあの人だけが、それに一番近かった。でも、あの人はもう長くない。だから、それまでに、本当のヒーローになれる人がヒーローにならないと・・・。オレは、なれないけど、でも近い事は出来るはずだって、思っちゃったから・・・。

こんなオレの『個性』でも人を助けられるはずだから、だから・・・。
ヒーロー科に・・・。
『一一一一最終種目』
・・・ あ、お昼休み終わっちゃった・・・。ご飯、食べそびれたな・・・。

◊？◊？◊？

トーナメント形式の一体一のガチバトル。尻尾の人、尾白と丸い人、庄田は棄権しちゃったけど、うぅ、早い段階で覚醒させとけば良かったのかな？でも心操が・・・。
とりあえず、くじ引こう。
・・・ えーと、芦戸？が一回戦目の対戦相手か。どんな人なんだろう？
あ、レクリエーションが始まる。オレはこの間にご飯食べよう。

◊？◊？◊？

第一回戦第一試合、緑谷ＶＳ心操。心操の洗脳が破られて緑谷が二回戦進出。心操、普通科の星か・・・。ヒーローにも目をつけられたみたいだし、来年からヒーロー科かな・・・。オレ・・・ 見てくれる人、いるのかな。
『一一一一飯田くん二回戦進出!!』
次、オレの番か。
『さァ行くぜ第五試合！障害物競走でも目立った行動してなかったけどなんでいんだ!?』
え、酷・・・。空中歩いたりしてたはずなんだけど・・・。
『普通科　手取掴!!』
「え、あ、やるぞー」
『対（バーサス）！あの角からなんか出んの？ねえ出んのぉ？ヒーロー科　芦戸三奈!!』
「にっひっひっひ一回戦は楽勝かもね」

「ま、負けない・・・ぞ」
角からなんか出す個性なのかな？怖い。掴めるかな？
『さあー行ってみよう！スターート!!』
とりあえず近づこう。どんな個性でもオレは掴めるんだから、ビビってちゃダメだ。
んお?!なんか滑ってきた!?
「先手必勝！」
左のアッパー！なら一歩後ろに引いて、伸びた腕を掴んで、投げ飛ばす！
「ありゃ!?」
「こ・・・このまま！」
投げた方に向かい、もう一押しを・・・。
「まだだよ！」
「うわっ」
なんか飛んできた。これ、酸か?!危な！もう！掴んで、投げ返す！
「うそっ?!うわわ！」
「えいっ！」
線のギリギリで踏ん張ってるなら、少し押すだけで大丈夫！
「っわ」
「芦戸さん場外!!手取さん二回戦進出!!」
やった！勝った！
「・・・あ、大丈夫？芦戸・・・さん」
「大丈夫大丈夫！それよりさ、なんであたしの酸を触れたの!?そういう『個性』？」
「え、う、うん。オレのはこういうのが得意なんだ」
「へ～凄いね！」
「凄い・・・？」
「もちろん！」
凄いなんて、初めて言われた。でも、たぶんこの『個性』の事を知ったら引く。離れていく。それが二一
「ねね、なんでそんな強そうな個性なのにヒーロー科にいないの？」

「あの、その・・・ ごめんなさい！」
「へ?!」
　あ～やっちゃった！逃げちゃった！逃げたら意味ないのに・・・。もしかしたらこの『個性』を知っても変わらず接してくれるかもしれない人なのに・・・。ダメだな・・・。やっぱり今日はいつもより酷い！早く、早くどこか、一人になれる所に・・・。

◊？◊？◊？

「・・・ ？」
　ここ、どこ・・・ ？薬の匂い・・・。
「おや、目が覚めたんかい？」
「・・・ リカバリーガール。どうして・・・」
「あんた通路で倒れてたんだよ？それを見つけた生徒が連れてきてくれてね」
「え、オレ・・・ そんな、あ、し、試合は？」
「今二回戦の第一試合が終わった所だよ」
「よ、良かった・・・。まだ時間ある・・・」
「お前さん・・・ どうして倒れてたんだい？試合を見ても怪我した様子もなかったし」
「それは、その・・・ ちょっと、自分でもわからなくて・・・」
　いつもなら一人でいれば自然とどうにかなる。オレはヒーローになれるって、そう思える。けど今日は、今日はなんか変だ。変にテンション上がっていつもしないミスをした。いつもは考えない事を何度もぐるぐる考えてた。逃げなくてもいい相手から逃げた。やっぱりおかしい・・・。
「お前さん、何か悩み事でもあるんかい？」
「え、いやそんな、事、は・・・」
「言ってみんしゃい。話せば、少しは楽になるよ」
「えっと、じゃ、じゃあ・・・。あの、えぇと、凄く強くて、カッコよくて、誰でも助けてしまうようなヒーローがもう少しで、いなくなっ

ちゃうかもしれない。っていうことを知ったんです。今の世の中、本当のヒーローなんてひと握りでしかも自分の命を賭して人々を守るようなヒーローは一人しかいなくて… そんなヒーローがいなくなっちゃうかもしれないって、知ったら、オレは、そんなヒーローには、なれない、けど… でも近い… ことは、出来るんじゃないか、って… 考えてて。オレの個性は、ヒーローに、なれるような物じゃ… ないけど、それでも、変わりに、次が現れる時まで、って…。だから、ここで、どうにか結果を出して… ヒーロー科に行きたいんです…」
「お前さん…。そうかそうかい。そういうことかい…」
「な、なん… ですか?」
「とりあえずその涙どうにかしんさい」
　言われて、気づく。頬を何かが流れている。
「な、泣いてません!オトコは家族が亡くなった時と友達が亡くなった時しか泣きません!」
「お前さんは女だろう!」
「っう…」
　オレは…。
「それも悩みのひとつかのう?」
「ちっちが… オレは… !」
「その一人称もちょいとばかしおかしいぞ?」
「っう」
　これはほんとに、違うのに…。
「リカバリーガール」
「急患デス」
「そういやそうだったね。お前さん」
「なんですか」
「体育祭が終わったらまたここに来な。合わせたいやつがいるよ」
「それって」
「そいつわお楽しみさね。さ、この子はこれから手術だからね。早く出てきな」
「手術?!っは、はい!」

手術っていったいどんな試合をしたんだろう？気になるけど、自分の試合を優先しないと・・・　控え室に行こう。

◊？◊？◊？

『二回戦第三試合！今の所特に特徴がない！手取掴!!』

酷い・・・・。

『対（バーサス）！今の所無双中の、常闇踏陰!!』

「・・・　あ、よろしくお願いします」

「ああ」

『さあスターート!!』

「行け！ダークシャドウ！」

「あいよ」

喋った。可愛い。・・・　あれ、この感じ・・・。ダークシャドウの攻撃は割と単調っぽい。なら、一気に隙を点いて、本体に・・・　！

「ッ！戻れ！ダークシャドウ！」

「遅い！」

「ッグ・・・」

お腹に一発入れた！後は、後ろから狙ってるダークシャドウを掴んで！

「何っ!?」

「うわっ」

本体に叩きつける！

「うぐ・・・」

「うぇ～・・・」

「よし。このまま・・・」

場外まで引っ張り出す！

「おりゃーー！」

「なっ、ダークシャドウ！」

復帰した！なら今度は、本体に連続で攻撃して、隙を点いてダークシャドウも攻撃だ！

「ぬ、っぐ、ぐぁ・・・」
「っう」
焦り、驚き、痛み・・・・・・恐怖。
「おぇっ」
でも、オレも感じる物だし！人のが何倍もキツくても、オレは！気にしない！
「常闇くん場外!!手取さん準決勝進出!!」
よ、よし！何とかなった！
「完敗・・・か」
「いや、そんなことっ、オレのはズルだから・・・」
「どういう・・・」
「ごめんなさい！」
「なっ」
まただ。またやった。常闇はたぶん受け入れてくれる人だ。芦戸もそう。でも、やっぱり何か怖い。次は準決勝。これに勝てば、後は一回だけ。次も頑張らないと・・・。

◊？◊？◊？

『さあやるぜ準決勝第二試合!!これで勝ったやつが決勝だー!!爆豪対手取(バーサス)!!』
「ぶっ殺す・・・！」
「ひぇっ」
・・・だ、大丈夫！ビビらなければ、何とかなる！いつも通りやればいい！さっきみたいにゴリ押しでもいいから！
「お、お願いします・・・！」
『スタートォ!!!』
「死ねぇクソモブがァ!!!」
「うわわっ」
手から爆発を起こして飛んできた！み、右の大振り！ならそれを掴んで投げる！

「っな?!っちィ!」
投げたけど爆破で勢いを殺してまた突っ込んできた!今度は単純な爆破!なら次は爆発を掴んで投げる!
「んだとォ!?」
隙だ!今のがどういうことなのか考えてる内に攻撃だ!この人思考が早いからさっさとしないとやられちゃう!
「ッ!」
爆破!予想より早い!あ、距離空けられちゃった。
「テメェ…」
「っう…」
焦り、怒り、憧憬、困惑…。いっぱいありすぎる…。気持ち悪い……。
「最初は避けまくるから目かなんかの個性かと思ったが、テメェのソレはそんなもんじゃねえな?本気で来いよ!!俺ァ完膚無きまでの一位が取りたいんだ…!出し惜しみしてんじゃねえぞ…!」
怒り、怒り、焦り… 曇りのない一番への執着。奥にあるのは憧れ。
「… うっ!」
ヤバい吐きそう。当然か。いつもこんな風に使わないもんね。出し惜しみなんてしてたつもりないけど、やれること全部やんないとダメそう!だったらキツくてもやるよ!ヒーローになりたいし!
「こんなとこで使うつもりはなかったが、そんなことも言ってられねぇ!ぶっ殺す!!」
一番強いのが来る!回転して威力を上げた爆破を出すつもり!でも、オレができることで、対抗出来ることなんて…。い。いや、一応アレがあるけどさっき作ったばっかだし試してないし!あーでもやるしかない!
「喰らえ!榴弾砲着弾(ハウザーインパクト)!!」
「く、空剣!」
わかる、わかるんだ。軌道も、爆発の強さも、回転も、軸も、腕の動きも。ここだ!腕と体が完全に伸びきる寸前、爆発を起こそうとパチパチいってるこの瞬間!オレの個性で作った空気の剣で、切る!!

「なっ!?」
「…う、そ……」
意識が…遠く、なっ…て…。

◊?◊?◊?

「…」
さっき見た天井だ。……試合の最中に意識が飛んで、ここ、か…。負けちゃった…。負け…負け、た…。負けちゃった。これじゃ、ヒーローになれないかもしれない…。これじゃ、次が来るまで、本当が…いなくなっちゃう…。
「う、ぅぅぅぅぅ……ごめん、ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…」
芦戸は強かった、でも違う。常闇も強かった、でも違う。爆豪も強かったし近かった、でも違う。本当には、遠かった。オレも近い訳じゃないけど、でも、でも…。
「この子だよ」
「っひ!ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
怒り、怒り、焦り、悲しい、悔しい、後悔、自己嫌悪、謝罪、感謝、苦しい。
誰、怖い。怖いよ!怖いよ…!
「ごめん、なさい…。ごめん、なさい…。許してください…。オレが、気に触ることしたなら謝るから、だから、近づかないでくれ…!酷い、感情だ…気持ち悪い…ウッ……頼む、頼むよぉ…!一人にしてくれぇ…!」
後悔、後悔、怒り、悲しい、悔しい、謝罪、謝罪、謝罪、感謝。
「うっ、ううぅぅぅぅぅぅ……」

◊?◊?◊?

どれくらい経ったかな。いつものように、何とか抑えることが出来

た。さっききた人には酷い事をしちゃった。謝らないと・・・。
「・・・ 起きたのかい」
「リカバリーガール。すいません、さっきの人って、どこに行きました？」
「お前さん、本当に大丈夫なのかい？」
「大丈夫、です。いつもの事なので」
「・・・ 気おつけなね。さっきのやつなら今頃ステージだろうさ。お前さんも行きな。表彰式だよ」
「表、彰？どうして・・・？」
「ベスト４なんだから当然さね。早く行かないと遅れるよ！」
「あっ、え、はい」

◊？◊？◊？

三位の表彰台に一人で乗っている。なんで？というか周りの視線が凄い。怖い。オレだけ場違い感が凄い。オレ、普通科だもんな・・・。うん・・・。
・・・ あ、オールマイトがきた。あんな身体なのに会場の外壁上から飛んできた。やっぱりすごいなぁ・・・。オールマイトがメダル渡してくれるんだ。これは嬉しいかも。表彰式来て良かった。
「手取少女、おめでとう！普通科なのによくやったもんだよ」
「いや、オレは・・・ いいんで、心操を見てやって、ください。オレはズルなんで・・・」
「そんな事はない！君だって、ヒーローになれるさ！」
「っえ？」
ヒーローに、なれる？オレが？こんなオレでも、ヒーローになれる・・・。本当が言うならなれるのかな。オレも本当のヒーローに一一
一一

後日談

体育祭の翌日、翌々日は休日で、いつも通りゴロゴロして過ごした。母ちゃんは普通に仕事に行ってたけど、二日目に帰って来て『これから大変になるだろうけど頑張ってね』って突然言われたのには少しビックリした。母ちゃんはオレと似たような個性で見えないし、本当にビックリした。でも大変になるってなんだ？なんか変な事したっけ？

どういうことか聞きたかったけど、帰ってきてすぐ寝ちゃったから結局聞けなかった。気になるけど、明日から学校だし、オレも早めに寝よう。

◊◊◊

朝、四時頃起きて二人分の朝食の準備をしてサッと食べて荷物を持って家を出る。母ちゃんは起きてから自分であっためて食べるはずだ。少なくとも家に帰る頃にはなくなってるし。母ちゃん待って遅い時間に出る位なら母ちゃん置いて先に出るに限る。あんな混沌とした電車乗るとか考えただけで吐きそうになるもん。

それに今日は雨だ。雨の日は人があんまり外に出ないから過ごしやすい。学校内は少し怖いけど、今日も頑張ろう。

◊◊◊

体育祭があっても、普通科からベスト４が出ても教室の雰囲気は全く変わらない。オレは授業はちゃんと聞いてても休み時間は寝ているからかな。でも視線はいつもより多いから、ちょっと息苦しいか

な。
　そんなこんなで放課後。一週間後にヒーロー科の職場体験が始まるからか、学校中がソワソワしていて微妙に気持ち悪い中、オレはいつもなら即帰る所を呼び出しをくらい、職員室に来ていた。なんで？

「…お前が手取掴、か」

　ピリッ…？警戒？

「はい。えっと、先生、は…？」
「…お前の個性で読んでみろ」
「え」
「出来ないか？」
「あ、いや…わかりました」

　えっと、相澤消太、イレイザーヘッド…この辺りだけでいいか。

「相澤消太先生、で合ってますか？あ、イレイザーヘッド？」
「ふむ」

　少しの驚きと、さっきより強い警戒？なんなんだ？…っう、ちょっと気持ち悪くなってきた…。

「今お前に対して俺の個性を使ったが効果がなかった」
「は、はぁ…それがなんなんですか？」
「お前の個性は常時発動型の個性か…　それとも…」
「？知らなかった、んですか？」
「いや、改めての確認みたいなものだ。それで本題だが、体育祭でお前を普通科だと言ったにも関わらずお前に指名をしてきた輩が何人かいてな。校長に報告したら、この際お前も職場体験に行ってこいとの事だ」

「…えっと、職場体験ってヒーロー科のやつですよね？一週間の」
「ああ」

一週間、一週間か…母ちゃん家事全般出来ないし言わないと夜ご飯食べずに寝ちゃうし…うーん…

「その、ありがたいんですけど、お断りさせて頂けないでしょうか？」
「…何かあるのか？」
「一週間も家を空けたらかあちゃ…母が生活出来そうにないんです。なので、お断りさせて頂こうかと」
「…そうか。まあ気が変わったら声をかけてくれ。週末までにならなんとかなる」
「あ…はい。ありがとうございます。それでは、失礼します」

職員室を出て廊下を歩く。
先生の個性については見なかったからわかんなかったけど、消せなかったって言ってたし、個性の発動を阻止する個性、か？それなら言ってた事も納得出来るし。でも、なんでそんなことしたんだ？オレの個性については役所にも正確に伝わってる筈なんだけど…うーん…

「おや、君は」
「え？」

急に声をかけられた？えっと、あ、

「オールマイト」
「…やっぱり、君は知っていたんだね。ついて来てくれ。向こうでゆっくり話そう」
「で、でも…その」

強い自己嫌悪と謝罪、そして圧倒的な怒り。

「ひぅ…」
「…リカバリーガールのところで話そうか」
「は、はい」

怖い。オレそんなに怒らせるようなことしたかな…それとも、ガリガリの骨みたいなオールマイトを知っちゃったからかな…うぅ…帰りたい…。

「さ、入って」
「し、失礼します」
「おや、あんたらが一緒って事はやっと話をしたってことかね」
「いえ、これからです。彼女が二人っきりが嫌なようだったので」
「すいません」
「お前さんが謝ることじゃないよ。こいつがそもそもの原因さね」
「ちょ、つつかないでくださいリカバリーガール」
「ふん!」

優しい空気…ここだけこの学校の中じゃないみたいだ。

「あの、それで話って…なん、なんですか?」
「ああ、そうだね」
「まずは座りな。話はそれからだよ」
「あ、はい。ありがとうございます」

オールマイトが正面に、リカバリーガールがオールマイトの左側に座る。

「…私はね。君が私の事についてよく知っていると、リカバリーガールに聞いたんだよ。それで、どこで知ったのかとか、誰かに言ったの

かという事を聞きたくてね。でも、前に会いに行った時は、随分と怖がらせてしまったみたいで…申し訳ない事をしたね」
「前に会いに来た…？」
「体育祭の時さね。お前さんが準決勝で倒れた後に来てただろう？」
「あっ、あの時…いえ、すみませんでした。何か怒っていたみたいでしたし、今も…。その、オレは誰にもオールマイトの事は話していないし、身体の事もオレの『個性』が原因ですから…許してください…出来るだけ誰にも関わらないようにするので…これ以上は」
「…。君は、あらゆる物を掴む事の出来る、『掌握』という個性らしいね」
「…っ、はい…」

怒りと悲しみ…。

「君はその個性で、様々な人の感情を見てきたんだね」
「…えっと」
「私はね。君に対して、怒りの感情を覚えた事はないよ」
「え」
「君に抱く感情は、感謝と謝罪、それ以外にはないよ」
「え、え？じゃあ、誰に、何に…？」
「私が怒りを抱くとすれば、私自身か、それかあの男へ対してだけだよ」
「…」
「私が不甲斐ないばかりに、君には無理をさせたみたいで…すまなかった」
「…いえ。オレが勝手にやったことですから…」

深い、深い謝罪…。

「頭を、上げてください。オレは、貴方のような本物に頭を下げさせるような人じゃ無いです」

「…君は、ヒーローを本物と、それ以外で区別しているようだけど…。どうしてなんだい？」
「……こんなこと言うのも、あれなんですけど…。自分の命を賭して人を救える人は、長生きしません。ヒーローは…特にそうです…。自分の命を賭して人を救ったヒーローは、ヴィランに殺されたり、建物の倒壊に巻き込まれたり、燃え盛る火に囚われたり、激流に呑まれたり、土砂に埋まったり、逆恨みで一般人に殺される事だって、あります」
「…」
「ヒーローは職業です。お金を稼ぐ為の手段です。多くの若者達はヒーローに憧れます。でも、その憧れには種類がある。多くの収入を得られるからヒーローを目指す人、自分の『個性』を合法的に使いたくて目指す人、貴方のように、自分の『個性』を誰かの為に使いたい人、貴方のように、多くの人を救いたい人、今、ヒーロー業界の上に立っている人達は少なからず、自分の手が、足が、届く範囲で多くの人を救っている。でも誰も、貴方のような、そこにいるだけで誰もが心穏やかに居られるような存在はいない。貴方が自分達を絶対に助けてくれると信じているから。絶対に助けてくれると思えるから。人々は安心していられるんです。だから、皆の心の支えだから、貴方が本物なんです」

身内以外に、こんなにも本音をはいたのはいつ以来だったかな。個性が出る前は、普通に喧嘩をして、心の内をさらけ出すなんてよくあったのに…。今じゃ、そんなことも滅多に無くなったんだよな…。

「貴方の次が、必要です。貴方はもう戦える身体じゃない。そんな身体でヒーローをやるなんて、自殺行為だ」
「……。君は、私の『個性』について知っているかな？」
「いえ…それが、何か？」
「いいのかい。教えちまって」
「はい。彼女には、知っておいて欲しい事です」

「そうかい。なら何も言わんさね」
「ありがとうございます。私の『個性』はね、代々受け継がれてきた物なんだ。一代一代、鍛えられてきた個性、ワンフォーオール。それが私の『個性』さ」
「受け継がれてきた、個性…」

嘘はない。あるのは尊敬と感謝と安堵。

「私の力の後継はもういる。彼なら、人々の支えになれるだろうという少年がいる。だから安心して欲しい。もし心配なら、君もヒーローになるといい。近くで彼の支えになってくれ。良き友として、ね」
「……。その…」
「なんだい？」
「その人の、名前って…」
「ああ、彼は緑谷出久。ヒーロー科一年A組の子だよ」

緑谷出久…。

「…」
「…私の事を案じてくれた事は嬉しい。だが、ヒーローとして、教師として、一大人として、君には自分の意思で将来を決めて欲しいんだ」
「オレの、意思…」
「君が雄英を選んだのは、ヒーローになりたいからじゃなく、安定した収入の得られる仕事に就きたかったからしいじゃないか。ヒーローは安定している。とは言い難いと思うけど」
「…そ、それは…その…」
「まあ、焦って決める必要は無いさ。ゆっくり、君のペースで決めて欲しい」
「…」
「私の話はこれでおしまいさ。随分と話混んでしまったね。時間は大丈夫かい？」

時間…。少し急がないと、夕飯遅くなるな…。

「えっと、その…今日はありがとうございました…。もう急がないといけないので、失礼します…」

「ああ、こちらこそありがとう。あっ、私の『個性』については口外しないでくれると助かる！」

「…はい。それでは…」

…ヒーローを目指すか、目指さないか。

オレも、オールマイトの事情抜きでヒーローになりたいと思った事はある。でも、すぐになれないと思った。というか、ならない方がいいと思った。ヒーローは危険な仕事で、いつ死ぬか分からない。それで母ちゃんを悲しませたくなかったんだ。オレが死んだら、母ちゃんは一人になっちゃうし、それが一番嫌だったから。それにオレの個性はそういう事には向いていないし。だから、安定した収入を得られるような、いい仕事に就きたくて色々考えたんだ。それで、雄英を選んだ。雄英なら色んなところにコネがあるし、その時はまだヒーローになりたいって思いを引きづってたから。

家族を取るか、他人の命を取るか…。

その選択なら、オレは母ちゃんを選ぶ。知らない人じゃなくて、家族を取る。やっぱり、ヒーローにはなれないかな。本物じゃあないし…。緑谷出久…A組の人がやってくれるでしょ…。だからオレは、オレは……。

「〝オレ〟は、どうしたいんだろ……」

家族を選んだら家族のため、他人を選んだら他人のため。じゃあ、オレは？オレのためにやりたいことって、なんなんだ？

◇◇◇

「随分と歪んじまった子だったさね。あんな個性だ、仕方ない部分はあるけど、さすがにねぇ…。いつヴィランになってもおかしくないよ、あの子」
「そう、ですね…。ヒーロー科なら、いろいろ改善出来る時間を取れると思うんですが…」

彼女は自身の個性を制御しきれていない。二人はそう考えていた。だが、その部屋に入って来た人物の言で改めて考える事になる。

「難しいと思いますよ」
「相澤くん？どういうことだい？というか何故ここに？」
「婆さんが経過見せろってうるさかったんですよ。それで、やつの個性についてですよね。やつの個性は典型的な発動系の個性じゃないんですよ」
「どういうことだい？」
「他人の思考を読む個性は他にもいくつかありますが、どれも本人の意思によって発動する物です。俺の個性を異形系の個性に対して使った時と同じ結果が出たんで、やつの個性は常時発動型。もしくは、無意識下で勝手に発動させてるんだと思います」
「…なるほどね」
「それは…」
「加えてやつは、自分の個性が常に発動している事に疑問を持っていなかった。無意識下ってなると、改善するのにどれだけ掛かるかわからないですよ」

考え込んでしまう二人だったが、先にオールマイトが動いた。

「よし！やっぱり彼女には、ヒーロー科に入ってもらおう！」
「本人が拒否したらどうするんですか」
「そこは、ほら…。何とかして…」
「はぁ…」
「まあ、仕方ないさね。そういう事が出来るやつじゃないよ」
「そうですね」

一人空回りする英雄だったが、意志は固そうであった。

◊◊◊

「ただいま～」
「おかえりー」

丁度、夕飯の準備が終わった頃に母ちゃんは帰ってきた。今日はいつもより早い。何かあったのかな？

「早かったね。何かあったの？」
「ふっふっふ…なんと母ちゃん、出張が決まりました～！」
「え”っ」

思わず手に持っていた菜箸を落としてしまう。

「ど、どこまで？数時間で行って帰って来れる所？！」
「やだな～掴を連れていく訳ないじゃん！一人で大丈夫だよぉ～」
「母ちゃんが一人で生活出来る訳ないじゃん！」

「うぐっ…、だ、大丈夫だよ…？お金さえあればコンビニでお弁当買えるし、飲み物だって…。ほら、洗濯だってコインランドリー行けばいいし！」

そんなこと言うって事は、長期滞在するんだろうけど…。

「本当に大丈夫？ただでさえ方向音痴なのに初めて行く場所なんて…」

「それは文明の力で何とか…。と、とにかく！母ちゃんは一人で大丈夫だから！掴は来週の職場体験、行ってきな！」

「な、なんで知ってんの？」

「ふふふ…根津校長とは知り合いなのだよ…」

校長先生と?!

「…掴はさ、母ちゃんのこと気にかけすぎだよ」

母ちゃんは靴を脱いでオレの前まで来ると、落としていた菜箸を拾い、オレに渡して来る。

「はい。いつもありがとね」

「いや…別に…、当然のことをしてるだけだし」

「…ふふ。母ちゃんをとるか他人をとるか？」

「っ！」

「そんなこと言わないで、どっちも選びなさいな！ヒーローになりたいならね！」

そっとオレを抱きしめてくれる母ちゃん…。

「母ちゃんも掴に甘え過ぎてたんだと思う。この出張を期に母ちゃんも家事とか頑張るから。掴は、掴のやりたい事をやりな。ヒーロー目

指したかったんでしょ」
「う、うぅぅう」
涙が自然と出てきた。
「泣かない泣かない。母ちゃん相手だからいいけど、弱さはあんまり外に出しちゃダメだぞ～。よしよし」
頭を撫でられる。少し、心が軽くなった気がした。

◊◊◊

次の日の放課後。オレは相澤先生に職場体験に行きたいという話をした。

次に向けて

「そうか。じゃあ、自分のヒーロー名とコスチュームの案をこの紙に書いて、明日までに出してくれ。ただ、コスチュームに関しては間に合わないと思ってくれ」
「…あ、はい」
自分のヒーロー名?!コスチューム?!そ、そんなの考えたことなかった…!
ど、どうしよう…この際適当に付けちゃうか?
「ああそれと、ヒーロー名を適当に付けたりすると将来苦労するからよく考えろよ」
「ヒュッ」
まままマジか!えー…、まあ、一旦置いといて、帰るか。
「えっと、それじゃあ、その、ありがとうございました」
「ああ。明日ちゃんと出せよ」
「はい」
どうしよっかな…。

◇◇◇

「ただいまー」
…ん、あれ?なんか焦げ臭いな…。
「…お、お帰り〜…」
奥から母ちゃんが顔を出してくる。…なんか、煤けてる…?
「母ちゃん、なんか焦げ臭くない?」
「え、あ〜ははは…。その〜…ね?軽くなにか作ってみようと思ったんだけど、失敗しちゃって…」
「何作ったん」
「た、卵焼き…」
「見せて」
「うぅ…、こ、これ…」

黒色の固まりが乗った皿を差し出して来たけど…。なんというか、どうやって作ったのか気になる出来だ。
「ちょ、ちょっとだけ火が強かったっぽいんだよねぇ～…」
「だからってこんな、ダークマターみたいなの出来る訳ないじゃん」
「ご、ごめん…」
「…怒ってる訳じゃないんだけど…。まあいいや、夕飯の準備するから、母ちゃんはよく見てて」
「はい…」

◇◇◇

「ヒーロー名とコスチューム？」
夕飯を食べて後片付けをしながら、相澤先生に言われたことを母ちゃんに相談する。あんまりいい案が出ないからな。
「ん～…、ヒーロー名ならいいのあるよ」
「ほんと？どんなの？」
「ルーラーってどう？」
「るーらー？」
「そ。支配者って意味があるの」
「オレは支配者なんて合わないけど…」
「あはは、違う違う。もっと意味を丸くして、場を治める人とか、みんなをまとめる人って意味、というか、そういう風になれるといいよねってこと」
「なるほど…」
ルーラーか…。
「よし。それにしよう」
「え、いいの？割と適当だよ？」
「大丈夫でしょ。うーんでもコスチュームはどうしようかな～」
「コスチュームは掴が何やりたいかで決めたら？とりあえず仮の物だろうし、動きやすい物でも良いんじゃない？」
「あ～…、じゃあとりあえず動きやすい物でって要望に書いておく

かぁ…」
「楽しみだね！」
「え？まあ、うん」
　変な物にならなきゃいいんだけど…。あ、そうだ。顔見られるのヤだし、仮面かなんかは欲しいな…。
「それより母ちゃん。明日出発でしょ？準備は出来てるの？」
「もちろん！掴が帰って来るまでに終わらせたよ」
「そっか。……で、結局どこまで行くの？昨日はいくら聞いても答えてくれなかったよね」
「だ、だって、昨日言っちゃったら掴絶対着いていくって言うと思ったから…」
「…で？」
「……あ…」
「あ？」
「…アメリカ…」
「…はあ?!ちょっ、嘘でしょ!?母ちゃん英語喋れないじゃん！オレも休みに様子見に行けないし！」
「えへへ…」
「えへへじゃないよ！どれくらい滞在するの!?」
「半年ぐらい…」
「半年!?大丈夫なの?!」
「大丈夫大丈夫！向こうに知り合いもいるし！」
「ええ…」
　ぜ…全然安心できない。やっぱりオレも着いてった方が…。
「掴は着いてきちゃダメだよ。……大丈夫だって。前にも仕事でアメリカ行った事あるし、心配しないの！掴は、来週の職場体験頑張ってね！おやすみ！」
「…うん。おやすみ」
　オレも、寝るか。

◇◇◇

翌日、いつも通りの時間に目を覚ますと既に母ちゃんの姿はなく、テーブルの上に『コスチューム出来たら写真送ってね！』という置き手紙が残されていた。
放課後に相澤先生の所へ行きプリントを渡すと、コスチュームの所で『正気か？』って言われたけど『多分大丈夫です』と言って帰ってきた。
夕飯を食べ終わって片付けをしている時にスマホに母ちゃんから連絡が来たけど、一言『Ｈｅｌｐ　ｍｅ』と書かれていてどうしようかと思った。ただ、こっちから何か出来る事はないから『Ｓｏｒｒｙ』とだけ返しておいた。…もしかして向こうの母ちゃんの知り合いからの連絡だったのかもしれないけど、どっちにしろ出来る事はなかったからこれで良かったはず…。

そんなこんなで数日経って、職場体験当日。集合場所である駅でオレはＡ組の面々に囲まれていた。
「ねえねえ！普通科の人だよね？体育祭で私と当たった！」
「ああ！爆豪の爆発投げてた！」
「ああ!?」
「常闇をボコボコにしてた人!?」
「む」
「え、えと…」
は、早めに来いって言われたから早く来たのに…どうしてこんな事に…。
「おいお前ら、一旦落ち着け」
「あ、相澤先生…！なんで手取さんがいるんですか？」
あ、名前覚えてくれてる人がいる……。
「体育祭でベスト４に入っただろう。それで指名がいくつか入っていてな。本来なら普通科の生徒には職場体験の予定はないんだが、校長が許可を出した。手取」
「あ、えと、手取掴です。職場体験先であったらよろしくお願いしま

す」
「まあ、各自出発まで時間があるだろうから、交流位しておけ」
「えっ」
「体験先ではくれぐれも失礼の無いようにしろよ」
　え、あ…行っちゃった…。
「手取」
「…あ、常闇…さんと芦戸、さん。この間は、その…ごめん。あの時はちょっと色々あって…」
「いやいや！体育祭では私も悪かったし！」
「ああ。俺ももう少し配慮が出来れば良かったんだが…」
「ほんとにごめん…」
「もういいよ！それよりさ、あの時私の酸を取ったのって、やっぱり手取の個性なの？」
「ああ、うん。そうだよ」
「やっぱり！」
「なるほど、掴む個性か…。だが、俺の動きを読んでいたのは？あれも個性か？」
「うん。ダークシャドウにも意識があったのにはちょっと驚いたけど…。えへへ、ヨシヨシ」
　常闇の腹から顔を出していたダークシャドウの頭をしゃがんで撫でる。んん、なんか独特な手触り…。
「クスグッタイ」
「かわいい…」
「意識があった、というのは？」
「ん？いや、ただの個性じゃなくてしっかり意思があって多少なりとも自分の感情やらなんやらを持ってるのは珍しいから。自我のあるものを生み出す個性って珍しいんだよ？」
「いや、そういうことではなく…」
「も、もしかして手取さんの個性って、相手の思考が読めたりするの?!」
「…えっと、そうだけど、君は？」

緑色のもじゃもじゃ頭…。どっかで見たことあるような…。
「あ！えっと、緑谷出久です！」
「君が…」
この人がオールマイトの…。
…強い憧れに、焦り。それに、
「…あんまり強そうじゃないな…」
「え？」
「なんでもないよ。よろしく」
「ああはい！よろしく！それで、思考を読む個性って、いつも読んでたりするの?!」
「今は別に…。見たいと思った時は見てるし、必要ない時は見てないよ。失礼だし」
「あ、そっか。確かに…」
「俺や芦戸との試合の時は、思考を読んで戦っていたのか」
「うん。それでダークシャドウのことに気づいたんだ」
「スゲーな。あ、俺ァ切島！よろしくな！にしても、なんでヒーロー科に来なかったんだ？体育祭の結果見る限りじゃ普通にヒーロー科に来れたんじゃねえか？」
「…それは」
「おい…」
「ひゃいっ！」
ななな、なんか凄い殺気が…！
「テメェーとの決着はいずれつけるから覚悟しとけよ先読みヤロー…」
「うぇ、ば、爆豪!?」
「文句あんのか？ああ!?」
「ひぃ！ないですないです！」
「…ッチ」
な、なんであんなに怒ってるんだ…？
「ああ、あんま気にしなくていいぜ。アンタとの勝負が中途半端で終わって、その後も散々だったから気がたってんだわ」

「えぇ…」
「つーかそろそろ時間ヤバくねえか？」
「あ！ほんとだ！僕もう行くね！ありがとう手取さん」
「いや…。あー、ちょっと待って」
「え？なに？」
「一つアドバイス。特別な物だって思わない方がいいよ。もっと、普通の物だって思った方がいい。みんなは当たり前に使ってるから」
「それってどういう…」
「オレもそろそろ行かないと。常闇さん、芦戸さん、ありがとう。またね」
「ああ」「マタナ」
「またねー！」
　また会えるといいな。
　…これから新幹線かぁ…。ヤだなぁ…。都内のヒーロー事務所にしとけば良かったなぁ…。はぁ…。

◇◇◇

　電車とは別の混沌とした車内で揺られること一時間、そこから多少人の減った電車でさらに三十分。オレが行く事になったココロノ事務所は、駅から数分の所にある二階建てのビルの二階にあった。
　…なんか、表札にココロノ「探偵！」事務所ってなってるけど、ここで間違いないよな…？とりあえず、インターホンを鳴らすか…。
「…はーい。どうぞ～」
　…。入って、みるか…。
「お、お邪魔しま～す…」
　中は…なんか、本とかファイルとか、資料っぽい物が至る所に置いてあるな…。ヒーロー事務所…？
「やあやあ、よく来たね！君が手取掴さん、ああいや、ルーラーだよね？」
　奥から資料とかを上手い具合に避けて入口に来たのは、ズボンにベ

スト、シャツ、ネクタイを締めている髪の長い女の人。
「…えっと、はい」
「私はロケート！このたん…、ヒーロー事務所のオーナーだ」
たん…？…あ、
「表札に探偵って書いてありましたね」
「あー、ははは。申し訳ない。元は探偵やってたから、ヒーローになってもみんな探偵として頼って来ちゃってね。前の依頼人の子供が表札に書いちゃったんだ」
「なるほど…？」
「とりあえず散らかってるけど、奥に荷物置いて着替えて来て。そしたら仕事の説明とかするから」
「はい。わかりました」
探偵って事は、ヒーローとしてもそういう関連の仕事してるのかな？

◇◇◇

荷物を置いて、コスチュームがないから持ってきた学校のジャージを来てロケートの所まで来たが…、
「うーん、聞いてはいたけど…」
「ダメですか？」
「ダメではないんだけど、ちょっと待ってて、昔使ってたの持ってくるわ」
まあ、確かにジャージでヒーロー活動するのはおかしいしな。…でも、昔使ってたってサイズで合うかな？
「えーっと、とりあえず、下にそれ着といていいから、こっちのシャツとジャケットにズボン、着てね」
「…わかりました」
普通のシャツに紺色のジャケット、ズボン…。なんか普通だ。サラリーマンっぽい。とりあえず着るか。
「よし、問題なさそうだね。それじゃあ…パトロール行こうか！」

「え？」

◇◇◇

「パトロールとは言ったけど、散歩みたいなものだから気楽にね」
「それでいいんですか？」
「いいのいいの。ヒーローが街を歩いてるってだけで、多少は犯罪率下がるんだから」
…うぅむ、本当に散歩気分なのがなぁ…。オレも、少しは力抜いて行くか…。
「んーと、仕事の説明、だよね？えっとそうだな～、まず、私達ヒーローは国からお金貰って成り立ってるんだよ。だからまあ、一応公務員だね」
「公務員…」
「そ。んで、実務…仕事が、犯罪の取締り。事件あると応援要請が来るから、ちゃんと行かないと怒られる。後は…ちゃんとその事件について申告しないといけなくて、その後貢献度とかで給料に差が出るね」
「給料の差…」
これはヤバいかも。たとえヒーローになれたとしても、しっかりやらないと生活がヤバいな…。
「ああ、もう一個あった。副業が認められてるよ。私の場合は探偵ね」
「探偵って儲かるんですか？」
「えぇ…直球だね…。うーん、人によると思うよ？私は生活出来る程度には稼げてたけど、今はヒーローやってるからあんまりそっちの依頼受けてないなぁ」
「そうですか…」
そういえば…。
「あの、なんでオレに指名入れたんですか？」
「ん？探偵業に役立てられる個性だと思ったからってのと、一人くらいサイドキック欲しいなぁって思ったから」
「…え、それって」

「そう。君が卒業してヒーローになったら、うちに来ない？っていうこと」
「え、あ、でもオレ、普通科だし…」
「あ～そこはまぁ…。別にあれだよ？普通科を卒業して、探偵助手としてうちに就職してもいいんだよ？免許だって、卒業してから取れないわけでもないし。まあ、考えてくれると嬉しいな！ってだけ」
「あ、ありがとうございます…」
本気で言ってるの、凄い嬉しい…。
「おんや、翔子ちゃん。散歩かい？」
「橘のおばあちゃん。一応パトロールだよ。最近はどう？」
「なんもさ。翔子ちゃんはどうなんだい？」
「私も大丈夫だよ」
「そうかいそうかい。ええことやんなぁ」
「そうだね。じゃあ、またね」
「はいはい。そっちのお兄さんも頑張んりんしゃいね」
「あっ、はい！」
散歩のついでに町案内をしてくれた。そして行く先々でロケートは話しかけられていた。お年寄りや子供ち。ゴロツキっぽい人達でさえ、ロケートが来ると笑顔を浮かべて挨拶をしていた。
みんな、ロケートに対して感謝や憧れ、尊敬の思いがある。ここら辺では、ロケートはヒーローなんだ。みんなにとっての身近にいるオールマイト。
うん、せめて、なれるなら、こういうヒーローになりたいな…。

職場体験一日目は、目指したいカタチが朧気ながら見えた、そんな日になった。

◊◊◊

職場体験二日目、この日は一日中迷子の猫探しをしていた。夕方になってちゃんと見つかったから良かったけど、ロケートが道行く猫に

近づく度に逃げられなければもっと早く見つかったと思う。
　そんな二日目は、日常の近くにいるヒーローの活動を知ることができた

◊◊◊

　そして職場体験三日目、何故か朝から保須市に来ていた。
「あの、なんで保須に？」
「えっとね…あー、ヒーロー殺しステインって知ってる？」
「まあ、はい」
　確かテレビで犯罪率がうんぬんかんぬん言ってたのを聞いたような…。
「そのステインが今まで事件を起こした場所で必ず四人以上のヒーローに危害を加えてるんだ」
「…つまり、まだここに現れる。と？」
「理解が早くて助かるよ！…出来れば昨日の内から保須に入って、いつでも動けるようにしておきたかったんだけどね…」
「あはは…」
　昨日最初に見かけた猫が依頼主の探してた猫で、駆け寄ったロケートに威嚇してすぐ逃げちゃったからなぁ。夕方まで逃げ回られたんだし、仕方ない。
「あ、勝手に動き回っちゃダメだからね。ステインの発見と事件の阻止が今回の目的だけど、普通に危ないから。全身に刃物携帯してるんだよ？」
「…はい」
「…ちゃんとわかったよね？」
「だ、大丈夫ですよ…」
「絶対離れちゃダメだからね…！」
　…そんなに念押しされても、単独でどうにかなると思えないから離れないけど…。
「わかりましたって」

「…。まあいいよ。パトロール行こうか」
「はい」

◊◊◊

「どこいったんだあの人…」
日が沈み出した夕方、薄暗さの増した路地裏でスーツ姿の掴が途方に暮れていた。それもそのはず、同行者にして職場体験先のヒーローとはぐれてしまったからだ。
（突然路地裏に行ったと思ったら直ぐにいなくなっちゃうんだもんなぁ）
「はぁ…」
「うわぁぁぁーーー!!??」
どうしようかと思案顔で歩き出したその時、遠くない場所から悲鳴が聞こえてきた。
「!?あっちか…!」
声がした方向へ走り出す掴。
幾度か道を曲がると、目の前には全身に刃物を携帯している不気味な男と肩から血を流して座り込んでいる男がいた。
「…!何やってるんだ!!」
掴が声を上げた瞬間、不気味な男一一ステインが携帯していたナイフを掴に向かって投げて来た。
間一髪でそれを避けた掴だが、次いで飛んで来たもう一本のナイフが腕に突き刺さってしまった。
「いづ…!?」
「…子供…か？何をしに来た…」
「悲鳴が、聞こえたんだ…!行くさ」
腕に刺さったナイフを、涙目になりながら抜いて言う。
「目標は…ヒーローなんだから…!」
「子供が立ち入っていい領域ではない…」
「…見逃せない！本物なら、絶対に逃げない!!」

その言葉に、ステインは口を歪ませ笑う。
「良いな…」
「何が…！」
言葉と共に走り出した掴、迎え撃つ形になったステインは持っていた刀を横なぎに振り、同時に空いた手で腰につけたナイフを抜き放った。
それをステインの股下を抜けることで避けた掴は、勢いそのままに座り込んだ男に近づき口を開く。
「動けますか!?」
「いや…、体が、動かないんだ…」
「くそっ！面倒な個性して！」
「…ハァ」
無言のまま走って来るステインを後ろ目に、座り込んだ男を表通りに向けて引きずり投げる掴。その後走って来たステインへ向かい直し、振り下ろされていた刀をスレスレで避け、後ろに飛んだ。
「うおっ?!」
「…ハァ」
「あっぶね！」
「邪魔をするな…、その男は、ハァ…正しき社会の為の供物だ…」
それを聞いて、そして、見たのだろう。顔を顰めて、掴は言った。
「確かに本物じゃあない。けど、ニセモノでもないよ」
「何…？」
「みんな、誰かにとってのヒーローなんだ。勝手に否定するだけじゃ、ダメなんだ」
「…だが、世間に必要なのは本物だけだ。その男を殺すことに変わりはない」
「そうか…。じゃあここで、止める」
走り出しながらステインの次を知る為に個性を使う掴。
そうして知り得た行動を潰しながら、倒れている男から離すようにステインに攻撃を続けていたが、全身に切り傷が増えていっていた。
（こいつ、俺の個性を知っているのか…？血を舐めようとする度に攻

撃の手が増える。だが…）
（クソ！どんだけやったってオレの殴る蹴るが効く訳じゃない！早く効果が切れて加勢してくれ！）
　自身の個性でステインの個性を知った掴は、効果時間が切れて後ろで倒れている男が加勢してくるのを待っていた。
　しかし、望んだ結果は訪れず、全く別の、それこそ、この状況を最悪にまで持っていくかのような事が起きた。刀が掴の顔を切った時に飛んだ血が、ステインの顔に飛んだのだ。刀に付いた血ではなく、自身の傷から出る血でもなく、ステインの顔に付いた血では防ぎようがない。
　ステインはその血をすぐさま舐め取り、掴は動けなくなってしまった。
「つぐ⁉（不味い！）」
　ステインは動けなくなった掴を無視し、その背後にいる男に刃を向ける。
「多少遅くなったが、ハァ…死ね。贋物よ…」
　そしてステインがその刃を振り下ろす瞬間、アーマースーツを着た何者かがステインを蹴り、その一刀を食い止めた。
「…ッ！」
「…血のように紅い巻物と全身に携帯した刃物……。ヒーロー殺しステインだな！そうだな⁉」
　蹴りを放ち、刃を向けられていた男の前に立ったアーマースーツの男一一飯田天哉はそう問いただす。
　何とか首を動かし、それを確認した掴はその思いを見てもなお声を上げた。
「その人を連れて、逃げてくれ…！」
「⁉…君は…！」
「また…邪魔が入った…」
　ステインは飯田の動きを止めるべく動き出し、怨敵たるステインが向かって来た飯田は掴との会話を中断し、迎え撃つ体勢をとる。
（不味い！不味い不味い不味い！このままじゃ飯田がやられて終いだ

！オレはまだ動けない！最低時間でもこんなに長いなんて……！何か……何かないのか!?）

未だ冷静にステインの攻撃を何とか受けている飯田だが、限界が既に迫っている。それを見逃すステインではないのもわかっている掴。焦りが募るが、その体は動かない。一番いいのはプロヒーローの到着だが、突然この現場に来てしまった掴が通報する時間はなく、飯田が通報していないのもわかってしまっていた。次善の策も尽く自身の体が動く事前提。何も出来ず、その一方的とも言える戦いをただ見ていることしか出来なかった。

そして遂に飯田が切られ、その血を舐められ動きが止まった。

最悪の状況も見えてきたその時、新たな人影がステインの顔面を殴り飛ばした。

「緑谷……くん…!?」

「助けに来たよ、飯田くん」

「何故…!?」

「ワイド……でやっ……！……」

「……！」

（あっやばい…意識が…。ここまで、なのか…？）

個性の使用による意識の低下が起こり、外界の情報を上手く取得できなくなっていく掴だが…一

◇◇◇

（……、……）

…え？今のは…。

「…！」

あれ…体が、動く…。なら、まだ…やれる…。せめて、少しでも情報を…。

「緑、谷…」

「!?手取さん!?どうして…!?」

「…」（時間か…）

「血ぃ…舐められる、なよ…」
「血?…そうか!血の摂取が個性の発動条件…!」
助かるよ、緑谷…。お前がそういう奴で…。それがわかったら、お前ならどうとでも動けるはずだ…。
「後は、頼む…」
「手……ん!……」
血ぃ流しすぎたかな…。

「…ん」
ステインは…捕縛済みか…。
「あ、おい。起きたぞ」
「手取さん!大丈夫!?」
「緑谷。…轟?」
ああ、来てくれたのか。ヒーローにも連絡済み、と。
「助かった。ヒーローはまだか?」
「あっ、ああ。まだだ」
「…そうか」
「手取くん…」
飯田か。礼と、注意…ぐらいしておくか。
「事情はどうあれ来てくれたのは助かった。だが」
「…っ!」
「ステインは気づいていた。私欲より人命を優先したから、標的にならなかっただけだ。…まあ、その…熱くなりすぎるなよ。冷静さが売りなんだろ」
「…!!…ありがとう…!」
さて…。
「ステインを任せてもいいか?」
「え?!手取さんはどうするの!?」
「ちょっと人を探してて…あ~」

ロケートの目的がステインだし、探さなくてもいいのか。ちゃんとわかってた割に緑谷の足切られてるし。
「やっぱり今の無し。オレも残るよ」
「そ、そっか」
「ところで緑谷、お前動けるか？」
「…ごめん。ちょっと厳しい」
「だろうな。よいしょっと」
緑谷を背負う。以外と軽いな。
「え、ええ!?いや、いいよ！」
「そんなこと言ったって仕方ないぞ」
「う、ありがとうございます…」
「ネイティブさん」
「!?な、なんだ？」
「まだ動けないですか？」
「あ、ああ」
「ふむ」
最大八分らしいし、後数分は動けないか。
「轟、悪いけどネイティブさんを背負ってくれないか？」
「わかった」
「すまない…」
「いえ、いいっすよ」
「飯田、ステインを任せてもいいか？」
「…っああ！任せてくれ！」
「じゃあ、大通りに向かおう」
「おう」「ああ！」
煙の臭い…。火が上がってるのか。…複数人と単独の人が近づいて来てるな。応援かな？
「む!?んなっ…何故おまえがここに!!!」
「グラントリノ!!!」
知り合…知り合いか…。
「座ってろっつたろ!!!」

「グラントリノ!!」
　顔面蹴られたな。大丈夫か？
「まァ…ようわからんが、とりあえず無事なら良かった」
「グラントリノ……ごめんなさい」
　緑谷…。程々にな…。
「細道…ここか!?あれ？」
「エンデヴァーさんから応援要請承った。んだが…」
　ヒーロー達も到着したな。これで一安心だ。
　救急車がどうこう言ってるけど、そこまで重傷って訳でも無いはずなんだよな。飯田は腕酷いけど、危ないところはギリギリ避けられてるし、まあ念の為行った方がいいのか。
「君も血まみれじゃないか！」
「大丈夫なの？」
「大丈夫です」
　多少深く切られたところはあるけど、ある程度止血してるし、最悪個性で無理矢理体動かせば動けないことはないからな。
「…ッ」
　ん？なんか高速で近づいて来てる？
「伏せろ!!」
　ッ!!緑谷が狙われてる!?んならぁ!!
「うわぁあ!?手取さ…手取さん!!」
　代わりにオレが捕まって、!!!!
「偽者が蔓延るこの社会も…徒に〝力〟を振りまく犯罪者も…粛清対象だ…ハァ……ハァ…」
　ステイン!?こいつ、無茶して…！
「全ては、正しき社会の為に」
　肺に肋骨刺さってるし、これ以上動くと死ぬぞこれ！
「助けた…!?」
「バカ人質とったんだ」
「躊躇なく人殺しやがったぜ」
「いいから戦闘態勢とれ！とりあえず！」

「何故一カタマリでつっ立っている!!?」
「！」
「そっちに一人逃げたハズだが!!?」
「エンデヴァーさん!!」
　エンデヴァー!?今、この状況で!?
「エンデヴァー…」
「ヒーロー殺し一一一!!!」
「待て轟!!」
…！
「贋物…」
「正さねば一一…」
「誰かが…血に染まらねば…！」
「〝英雄〟を取り戻さねば!!」
「来い。来てみろ　贋物ども」
「俺を殺していいのは本物の英雄だけだ!!」
　声が二重に聞こえる…？つぐう、頭に響く…！
「く…そ…」
　体も上手く動かせないし、視界もチカチカしてる。ステインを早く拘束して治療して貰わないといけないのに！
「はぁ…はぁ…」
　不味い、また…意識が……。

◊◊◊

　目が覚める。と同時に、目を開けていないはずなのに周囲の景色が見えるという奇妙な現象にあった。それにいつもより鼻が利くしよく聞こえる。なんだろう、いつもより情報が多い気がするけど、変な感じはしない。
　目を開けてみる。…変なものが見えるとかじゃないか。なら、大丈夫かな。
　しばらくして、医師と看護師がやってきた。

腕の刺し傷等多数の切り傷があり大きなものもあったが、気絶の原因は血を一気に流してしまったことらしい。また、傷口が多すぎていつどこが開くかわからないためしばらくの間運動等の禁止を言い渡された。

それから少しして、来客がいるとのことで別の病室に移動した。移動した先には緑谷達と来客がすでにいて何やら話をしているようであった。

「失礼します」

「あっ、手取さん！」

「みんななんともないみたいだね」

来客の人達は緑谷の体験先のグラントリノさん、飯田の体験先のマニュアルさん、保須警察の所長の面構犬嗣さん。あとロケート。

「君がこの件に関わっている最後の雄英生徒だワンね」

「はい。それでどういう風にこの件を丸く収めるおつもりですか？幸いと言っていいのかわかりませんが、目撃者はヒーローとここにいる我々雄英生徒のみですが」

資格未取得者が、相手がヒーロー殺しという凶悪犯だとしても『個性』を使用して危害を加えたのなら、規則違反で処分が下るはずだ。

「…そうだワンね。簡潔に言うのなら君達が関わらなかったということで収めるつもりだワン」

「なるほど。みんなも納得しているようですし、それでお願いします」

なんだろう、大小あるけど所長さん達も含めてみんな驚いているような。

「…君は、それでいいのかワン？」

「問題ありません。私がいなくてもヒーロー殺しを仕留めることは出来ました。結果を見るのなら戦闘途中で気絶した私は邪魔者でしかなかった。いてもいなくても結果は同じだったのです。なら邪魔者であった私の意見は必要ないでしょう」

結果は変わらなかったはずだ。轟は緑谷の連絡を受けて駆け付け、ヒーロー達をよんだ。三人いたんだ。ネイティブさんがもう少し傷を負っていた可能性はあるけど、それでも命に係わるほどの傷には

……あれ、なんで可能性の話なんて？
「…わかったワン。だけどこれだけは言わせてもらうワン。君がヒーロー殺し逮捕に貢献したこともまた事実。だからこそ感謝を。ありがとう！」
「…ありがとう、ございます」
頭を下げられたから下げ返す。普通、こちらが先に頭を下げるんだけど、タイミングを見失った。
その後、ロケートを除いた警部達が帰るということで見送り、そのままロケートと話をすることにした。
「ロケート」
「っ！何!?」
思った以上の反応だ…。謝罪の思いがあるのはわかってたけど、罪悪感と不甲斐ないって感情まであるとは…。
「…えっと、その、すみませんでした。離れるなって言われてたのに離れて、ステインとの戦闘を避けないでこんな風になっちゃって」
体中包帯でグルグルだ。ヒーローになるなら、いちいちこんなことになるわけにはいかない。もっと強くならないと…。
「君が謝ることじゃないよ！…私が、もう少し君に配慮しておけば…。君は…いやごめん、何でもない」
強い後悔と無力感、昔を見てる目だ。オレを見て、別のだれかを幻視してる。でも懐かしんでいるだけで、そんな自分が嫌になってる。
「それで？まだあるんでしょ？」
「はい。医者からしばらく運動は禁止だと言われました」
「それって」
「はい。これ以上の職場体験は厳しいと思います。だから、お礼を。短い間でしたがありがとうございました」
「ううん。私も、ありがとう。短い間だったけど、君と一緒に仕事が出来てよかった。また、一緒に仕事しようね」
「…はい。その時は、よろしくお願いします」
握手をして、ロケートは帰っていった。最後には罪悪感とかそういうのはなくなっていて、少し嬉しくなった。

オレにとっての職場体験最終日は、少しの後悔と今後への考え方を知る日となった